

土木学会創立百周年 — 持続可能な社会の礎を築く —

公益社団法人 土木学会会長
(高知工科大学 副学長)
磯部 雅彦
Masahiko Isebe



一九一四(大正三)年に創立された土木学会

が昨年で百周年を迎え、八支部における土木コ
レクション・土木カフェや、大阪大学での九月
の全国大会における特別企画行事、九月一日の
記念切手発行、土木の日を挟む百周年ウィーク
での国際フォーラムなどを経て、十一月二十一
日には皇太子殿下、ならびに国土交通副大臣や
海外の二一学協会の会長等のご臨席を得て土木
学会創立百周年記念式典・祝賀会を盛大に執り
行うことができた。これは、土木学会会員、関
係の方々、団体のご協力の賜物と、心からの感

謝の念でいっぱいである。

記念式典では、土木学会百周年宣言を行った
が、その主題は「あらゆる境界をひらき、持続
可能な社会の礎を築く」ということである。

第二次世界大戦直後の食糧難の時代には、
様々なものが不足し、それらを充足させること
が、国民の共通の目標であり、価値基準が明解
であった。為政者から街角の市民、山村の住民
に至るまで、同じ方向にそれぞれに力の限りを
尽くした。その努力は大きく実を結び、やがて
少なくとも巨視的には目標が達成され、逆に飽

食の時代とか、物の豊かさに代わる心の豊かさ
などの言われ方がなされるようになった。

今や、価値観の多様性の時代である。特に、
戦後の貧困時代を経験していない世代にとって、
単一の価値評価軸はなく、善悪の概念も所与の
ものではない。この意味で、戦後世代は迷える
世代であるとも言える。

評価軸がはっきりしない以上、なすべき方向
性の議論では説得力が揺らぐことになる。食糧
供給、経済発展や生活の利便性は、どこまでも
追求すべき絶対的な評価軸として使えるわけ

はない。だからといって、哲学・宗教まで遡っ
て評価軸を議論すれば、共通の合意という出口
が得られなくなるであろうことは、これまでの
歴史が示すところである。そして問題は、この
状況にあっても、社会基盤施設が共有の財であ
る以上、ある判断基準を定め、合意や共通理解
を形成することが不可欠であるということだ。
そこで、その評価軸として提言したのが、「持続
可能な社会の礎」ということである。

人類は生物の一種であり、重要な機能の一
つとして種の保存が位置づけられ、埋め込まれ
ていることは明らかである。社会をそれと整合
するようにすることは、根源的な目標となるべ
きことである。それが持続可能性につながるこ
とになる。

戦後の高度成長は、国民を飢餓や貧困から救
い、健康状態を改善して長寿命社会を創り上げ
て大成功を収めた。しかし、その半ばからは、
環境問題と総称される、大気汚染や水質汚濁な
どによる生活環境の悪化が顕在化した。また、
化石エネルギーなどの消耗型のエネルギーの枯
竭も現実的問題となり、さらにそれにもなう
地球温暖化の問題も顕在化しつつある。加えて、
洪水、土石流、崖崩れ、地震、津波、火山噴火

など、自然災害への備えが喫緊の課題となっ
ている。さらには、テロや事故など、人為起源の
災害にも対処が必要となってきた。これら
は、人間生活の継続性を断ち切るものであり、
人類の持続性に対する大きな障害となる。

持続可能な社会を実現するためには、まずエ
ネルギー消費を持続可能にしなければならぬ。
地球が受ける太陽エネルギーに対して、一万分
の一のオーダーである現在の消費エネルギーを、
すべて再生可能エネルギーや、ほぼ無尽蔵の核
融合エネルギーに変換しなければならない。ま
た、さらに多くのエネルギーを利用可能にして、
鉱物資源などをすべて再利用することも必要で
ある。そして、食糧生産や居住などのための土
地利用も持続可能なものにする必要がある。ま
た、自然・人為の災害から人命を守り、被害を
耐えうる範囲に抑えなければならぬ。そして、
そのような社会を維持するために、人間が創り
出した社会資本を維持管理していかなければな
らないのである。

このような内容に言及すると、持続可能な社
会の礎を築くというのは、この場に踏みとどまっ
て動かないという消極的なものでは決してなく、
新たな社会の構築という極めて積極的な内容を

含むものであることが理解できる。そして、そこ
に土木の貢献する余地は無限に存在する。どの
ような持続可能な社会の礎を築くのか、そこに
若い人々が夢を持って参加する魅力が存在する。
我が国に喫緊な課題としては、少子高齢化の
問題があり、労働力の不足を乗り切るには、高
齢者や女性が積極的に社会参加できるように、
交通や都市などの社会基盤を整えなければなら
ない。資源が貧弱な我が国としては、世界にお
ける適切な経済活動・経済貢献が、国民の生活
財を稼ぎ出すのに欠かせない。また、災害で生
命が奪われない社会基盤も必要である。そして、
このような項目は枚挙にいとまがない。

社会基盤施設、あるいは社会が、人々の個人
の幸福そのものを提供できるとは思わない。し
かし、人々が飢えることなく、危険にさらされ
ることなく、環境に不快を感じることもなく、
それぞれの幸せを求めてそれぞれの努力によっ
て生きられるようにすることはできるはずであ
り、それを目指して持続可能な社会の礎を築く
ことが必要である。この目標は、いわば北極星
のようなものであり、人が旅するとき、絶対
にぶれることなく、進むべき道の方向性を示す
遠い目標である。